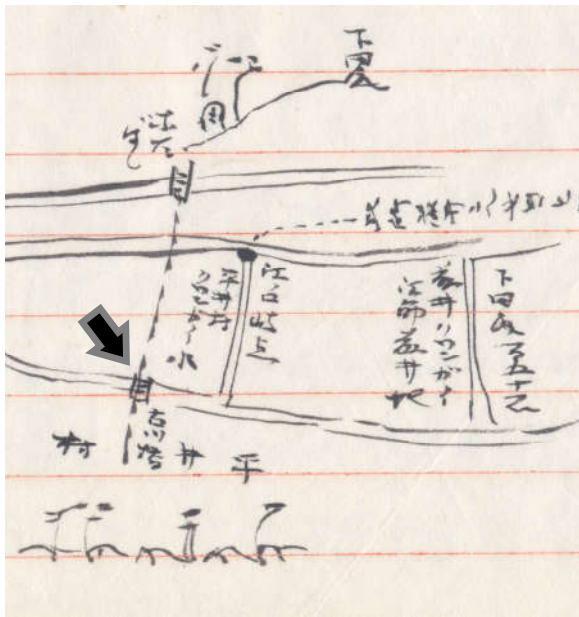


「柏崎の橋」 32 ふるかわ 古川橋・稲穂橋

古川橋は、平井集落に沿って流れていた旧鯖石川に架けられていた橋である。架橋は明治12年8月、同34年9月に架け替えられた。

『柏崎文庫』に描かれている絵図に古川橋をみることができる。絵図には古川橋のほか「奈た橋」や石碑、鯖石川の灌漑用水についても記されている。



平井村に古川橋とみえる
(『柏崎文庫』平井村より一部抜粋)

鯖石川は、古来より全川にわたって蛇行しており、川沿いの集落は洪水に悩まされ続けてきた。そのため、昭和21年より県の直営工事として河川改修が開始された。ショートカットの導入により河川を直線化、洪水流を下流に早く流し河岸侵食を抑えるよう対策が講じられた。

こうした河川改修により古川橋は廃橋となり、古い川筋はその後土盛りされ、改修後の川には昭和26年、稲穂橋が新たに架せられた。



木橋の稲穂橋

稲穂橋は下田尻から平井に向かう道路上に架かっている。近くにある東中学校が開校した当時はまだ木橋であったが、昭和51年11月に8,200万円もの巨費と2年の歳月をかけ新しい橋が竣工、現在の姿となった。

この橋は、延長50m、車道6mの2車線、両側に1.5mの歩道が整備された。歩道を組み込んだ橋梁は柏崎では国県道を含め初めてであった。当時、北陸自動車道建設が本格化しインターチェンジに繋がる重要路線として期待されていたため、建設省も特別に予算計上したという。現在、橋は期待通り地区住民にとって不可欠の存在である。



現在の稲穂橋

当時、斬新な朱色の橋は地区発展の象徴であった。

鯖石川は時として荒々しい姿を見せるが、田尻の水田を潤し豊かな実りを与える。古川橋の思い出は薄れても、稲穂橋が川を静かに見守っている。

●参考にした本

柏崎文庫 第18-2巻(080 冊) 関 甲子次郎 著
田尻村のはなし(224 冊) 酒井 薫風 著
植木組百年の歩み(510 冊) 植木組百年の歩み編集委員会 編
柏崎日報 昭和51年12月 柏崎日報社